

西座 理恵 提出 学位申請論文

『民間伝承における「面」の研究』審査要旨

論文の内容の要旨

西座理恵の学位申請論文「民間伝承における「面」の研究」は、「面」を取り上げる口承文芸や文芸作品で、「面」がどのような役割や機能を果たし、意味づけられているかを論じたものである。現代におけるメディア等でも、面が「変身」と結びつき、その象徴として記号化されている場合が多い。しかし、昔話「肉付き面」および近世期の文芸作品や浄瑠璃等では、宗教者に救済されて面がはずれる一方、伝説でははずれず鬼と化すものもある。こうした「面」の機能の違いがどのような法則に基づいているのかを、昔話、伝説、文芸作品を取り上げ追究していく。

最初の「先行研究と研究の特色」では、研究内容の立場や視点を明らかにす

るため、「面」にかかわる先行研究51冊を八項目にわけて紹介し、本稿の視点や方法を明らかにする。本論文の構成は、「研究の目的」および「先行研究」に続き、第一部「昔話における面」、第二部「肉附面」モチーフの生成と変容」、第三部「『酒吞童子』『肉附面』の新展開」の三部に分け、第一部を四章、第二部を三章、第三部を五章立てとし、都合十二本の論文を配置する。口承文芸や説話、草子類における「面」の総合的な研究を志向している。

第一部は昔話における「面」の追究で、一章「昔話「肉附き面」と蓮如信仰」では、昔話「肉附き面」を取り上げ、伝承状況の分析を試みる。百例による「構成要素表」に基づいて、話の傾向と地域分布の分析を行なう。それによると、浄土真宗の濃厚な地域では寺参りや面の剥離に蓮如の影響などが見られるが、稀薄な地域では宗教色が薄れ、嫁姑の対立葛藤が中心となる。昔話が現実生活を強く反映し、寺参りよりも姑が過酷な労働を課すことへの反発が底流にあると指摘する。

二章「昔話「肉附き面」の背景」では、昔話の歴史的背景を考察する。インドの仏典「雑宝蔵経」や中国の漢籍の嫁姑の葛藤譚では、姑が加害者となる話

はない。昔話には仏典や説話からの翻案もあるが、「孝行」を基調として姑に危害を加える嫁には天罰がくだる。したがって姑が戒められる昔話「肉付き面」は、仏典や漢籍等の影響ではない。転じて「嫁威し」を流布させた近世期の『二十四輩順拝図会』や幕府と関わり深い『官刻孝義録』をもとに、嫁の仕事や寺参りの状況を検討すると、近世の女人講等で日常的に寺参りに行くことはない。嫁姑の問題が顕在化してくるのは十八世紀初めごろとする社会学的な研究や、吉崎御坊に関する歴史的な論考を踏まえると、昔話「肉付き面」は、近世後期の嫁姑の対立を反映した内容であるという。データにもとづく結論には説得力がある。

三章の「昔話「鬼の面」における「鬼面」の呪力」では、「鬼の面」を被った者が、博打打ちや盗賊を「面」をトリックに用いて脅かして金銭を手に入れるなど、笑話化の傾向が見られる。ただ、類話が『法華経直談鈔』や『直談因縁集』などにあり、山中で猿楽者が暖を取ろうとして衣装や面を付けたのを周囲が鬼と勘違いし、共に逃げるといった結末である。初出の『百喻経』では衣装を着

けて鬼と勘違いされるが、面を付けることはない。天台宗系の文献に見られることから、「摩多羅神」の祭礼も関連し、招福性に重点が置かれる。昔話「鬼の面」を歴史的文献との把握に対し、次章では現在の地理的環境における「鬼の面」の分析へと進む。

四章「昔話「鬼の面」の伝播と背景」では、昔話「鬼の面」の伝承状況を示し、続いて「愚息型」と「孝女型」のサブタイプについて考察する。「愚息型」は中国地方の山間部に集中して分布する。主人公が山間部から町に正月の買出しで、実用的価値のない鬼面を買うことから始まる「愚息型」には、山間地と町場と往来する行商人の伝播が想定されるという。商品経済が僻村まで浸透してくる時代性は、「愚か村」話と共通する。

一方、「孝女型」は奉公人の女性の孝行譚で、女兒名が出てくることから絵本などのメディアによる流布も影響していると。両タイプの背景には、貨幣経済が村々に浸透し、町場と山間部との生活格差、奉公や女子の出稼ぎといった社会状況、経済格差などの問題が反映しているという分析は的確である。

第二部は伝説における「面」に焦点を当て、一章「肉付き面」モチーフの変容」では、「肉付き面」モチーフの多様性を問題にする。『福井県大野郡誌』『村誌稿』に載る伝説は、一向一揆による平泉寺の滅亡の際、盗んだ面が顔から離れなくなるという宗教色の強い話である。近世の文芸作品の「肉付き面」では、女性の顔から離れなくなるという話があり、柳田國男は祭礼において少女が仮面を付けて水の神に扮するという信仰面から解釈するが、ただ取り上げる事例との整合性に欠ける。「肉付き面」モチーフには、女性の嫉妬や内面の醜さといった点からの考察が必要であると述べる。

二章「白馬村の「七道の面」伝説」は、長野県白馬村の「切久保諏訪神社」の七道祭にちなむ「おかる」の伝説である。おかるは神社所有の面を被り姑を脅かそうとではずれなくなり、山に籠る。同種の伝説を『小谷口碑集』や『小谷四ヶ庄傳説集』、『北安曇郡郷土誌稿』などと比較、検討する。北安曇郡周辺には山の姥神の伝説も多く、女性を忌避するところに共通性がある。「おかる」の伝説の背景には女性と祭礼の面との関係を忌む意味合いが含まれているとい

う推測を述べる。

三章「肉付き面」モチーフの多義性」では、前章の「おかる」の伝説をさらに敷衍させる形で、女性と面を山の神信仰と関係づけて考察する。日本では山の神を女性とする地域が多く、そのため山の神の祭礼に女性が参加するのを禁じているところが多い。切久保諏訪神社の「七道祭」の伝説や、新潟県弥彦神社の大大神楽など、山の女神に関わる祭礼では女性が面を付けることを厳しく禁じている。近世期の文芸作品である『磯崎』を、こうした民間伝承を踏まえると、磯崎で面を被る女性が「山の神」のように醜悪で嫉妬深く、色好みという特徴が明らかになる。「肉付き面」モチーフの背景には、女性と祭礼、「面」にまつわるセンチティブな問題が内在していることを指摘する。

第三部の一章「新潟の「酒吞童子」伝説」は、国上寺に伝わる「酒吞童子」伝説が、「肉付き面」モチーフではなく顔が鬼になるものであることを示し、鬼への変化モチーフは仏教説話の妬婦譚に多いが、関東以北の「酒吞童子」伝説も同様であるという。国上寺の「酒吞童子」伝説では、外道丸が国上寺の稚児で、弥彦

神社の「大大神楽」を舞っていたことから、近世期の国上寺と弥彦神社の関係から分析していく。また、近世初期の「酒吞童子」絵巻や、古浄瑠璃の「酒吞童子」などが、国上寺の「酒吞童子」伝説に影響していることを考察している。二章「関東以北の「酒吞童子」伝説」と「肉付き面」では、関東以北に伝わる「酒吞童子」伝説を、古浄瑠璃や物語と一致するもの、子ども時代が「鉄人」の要素があるもの、恋愛との関係で顔が鬼に変化するもの三つに分け、それぞれの関係や成立の事情について考察する。

三章「酒吞童子」伝説と鉄砲・金属産業の信仰」は、吉田綱富『童子百物かたり』の記事から伝説の伝播を問題にする。記述者の吉田の先祖が、米沢藩で鉄砲の技術に携わっているが、それ以前の経緯を辿ると、長野県の高井地方の山中で、狩猟などをしていた頃、地侍や修験などから鉄砲の火器を取り扱う技術を習得し、戦国大名の武田家や上杉家とも関わりを持っていたことが明らかになる。直江兼統の本拠地である新潟県長岡市与板町は鍛冶師の活動が盛んであり、鍛冶の職種が酒天童子の伝説に影響を及ぼし、伝播にも関わっているこ

とを指摘する。

四章「お伽草子『伊吹山酒典童子』と神事芸能の「面」」は、『伊吹山酒典童子』における面を、伊吹山山麓の雨乞い習俗と「面打ち」を視野に置いて考察する。伊吹山は修験道の霊場であるとともに水分の山でもあり、林羅山『本朝神社考』は、祭神の伊吹大明神はヤマタノオロチであると記す。また、この地域は木地師の本拠地でもあり、木地師は面打ちも行っていた。水害をもたらす荒ぶる神ヤマタノオロチ退治の神話と、伊吹大明神の子である酒典童子の「肉付き面」の構成と関係づけて解釈する。「面」を多面的にとらえようとする意図はが見られる。

五章「作品「ひよつとこ」の「面」の解釈」は、芥川龍之介の「ひよつとこ」を取り上げ、江戸期の「面」をめぐる怪異的な精神性を受け継ぎながらも、近代の自意識や人格の多面性といった問題と対比させて「面」の怪異的な側面と人間の不可解な精神性とをオーバーラップされたところに、「ひよつとこ」の近代的な面の意義があると解釈する。象徴性を含んだ「面」への新たな視点とい

える。

結論では、全十二編の論文の内容を振り返り、そこで明らかになった点、課題点などを簡潔にまとめ、「面」のもつ意義を再確認する。女性の「嫉妬」や「女性変化」の問題を、社会文化史の流れに位置づけ、「肉付き面」モチーフの出現の時期や文芸との影響関係など、生成と変容の過程を示す。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本の口承文芸や説話・草子類などの文芸において、「面」がどのような役割をもって扱われ、機能しているかを具体的、個別的に事例にもとづいて精査し、面のもつ意味を総合的に追究したものである。その成果を示す方法として、これまでの「面」の研究を丹念に調べ、それを自説のための客観性の担保とし、論証の補強に用いる。そこから対象となる民間伝承や文献資料を広く収集して比較分析の材料とする。問題追究の中心は、「面」が口承あるいは

文芸における話の世界でのテーマ構築で果たす役割であり、それは「面」のどのような機能、性質にもとづいているかを明らかにすることである。物語構成上のアイテムである「面」を物語技巧の上の分析にとどまらず、発想の根拠を日常生活のレベルにおいて総合的に追究するという問題意識の鮮明な研究といえる。

その研究の具体的な結果を本書の中から引用すると、「酒吞童子」、嫁の姑おどし、女性忌避の文脈にある、はずれない面は、はずされる面の後に登場すると考えられる。そして「嫁おどし」の「肉付き面」に関しては、葛藤のパターンが嫁姑よりも正妻と後妻の方が古い」と、物語構成の趣向についての歴史的展開を位置づける。そうした話における「面」の役割が、悪霊退散や御霊鎮めから「神楽や延年において人が面を付けるのは、生身の人間の姿では荒ぶる神や精霊と対峙できないからではないだろうか。例えば、近世の文芸作品には、自分の身を隠す意味合いで用いる面も多くみられる。面の機能が人ではない何かに扮するためのものなら、それを用いる相手もまた人ではないのであろう。

人が面を付けるのは、靈力を具える必要があり、自身を悟られないよう身を守らなければならないときであると考えられる。そこから、「肉付き面」という表現の根底にあるのは、おどすことはもちろん、面は人を相手に用いるものではないということではないだろうか（「結論」と、面の機能と話の世界における倫理的規範へと一般化して結論づける）。

「面」を個別、具体的な事例から一般的な社会倫理の法則へと結びつける点は、説得力があり鮮やかな手法といえる。このような問題関心や研究の成果は、少なくともこれまでにはなかったものであり、当該論文の独自性であることは間違いない。

続いて、当該論文の審査内容の是非について述べる。本論文の評価すべき点は、次の三点に集約することができる。その第一は、「研究対象の先駆性」である。面を「仮面」と置き換えると、これまで祭祀や芸能、演劇などといった諸ジャンルからの文化論や芸術としての研究は多数ある。しかし、本論文が志向する話や物語の世界における「面」の追究はほとんどない。

本論文の先行研究で取り上げられている中でも、「肉付き面」の研究では藤島秀隆のものが唯一といえる。その藤島も北陸の事例に限り、仏僧の伝播とといった点に限られたもので、全体像には遠く及ばない。御伽草子の「酒吞童子」や「磯崎」は国文学研究からのアプローチはあるが、しかし、民間伝承との異同や比較といった論究は見あたらない。まして昔話「鬼の面」については、専門的辞書の項目にすらさえない状況で、伝説の「肉付き面」まで取り上げるなど、民間伝承の話の世界における多様な「面」の機能について、積極的に掘り下げ、分析、考察を加えている。こういった研究が手薄で未開拓の部分に果敢に挑み、試行錯誤を重ねながら、体系立った本論文における研究成果は大いに評価できる。

第二は、研究目的の視座である。「面」を通して見えてくる話や物語の奥深さを適確に提示していることである。話型やシチュエーションにおける面の機能の背景にある生活や人間模様をキャッチし、それを語りの場に戻して分析していることである。昔話「肉付き面」が蓮如の説教話として伝播されてきたとい

う通説を、仔細に伝承事例を分析することで、宗教色よりも現実の嫁姑の葛藤が面に込められていることを指摘する。この嫁姑の葛藤は、江戸後期の幕府の『官刻孝義録』の背景にある現実で、しだいに嫁姑の問題が顕在化してくる日本の農村の実態と重なるものであるという考察は適切である。「面」をめぐる葛藤を、話のテーマとの関連から解釈する一般的な理解を越えて、時代や民俗、生活を含めたパースペクティブな手法を用いて浮かび上がらせる方法は学ぶ価値がある。

第三は、「研究方法の強靱さ」である。帰納法的方法を用いながらも、先行する研究を貪欲なまでに取り込んで論述へと血肉化させていることである。本論文には十二本の論考があるが、その中で七つの表が用いられ、各表における多寡の違いはあるが、四百近い事例を分析材料として利用するなど、帰納法的、客観性に立脚した方法である。一方で、「先行研究」で紹介する多くの研究書を下敷きにして、独善にならない配慮を持って意見や結論が示されていることである。同時に、常識や権威にこだわらず、主体的な立場から数量化、相対化する

る方法に貫かれている。本論文はこうしたバイタリテイある研究姿勢、学問研究への好奇心、探究心に満ちているといえる。

次に、課題とすべき点を上げるとすると、「諸刃の剣」のたとえではないが、評価の部分が欠点を含むことを指摘しておきたい。第一の「先駆性」は、独自の開拓分野であるために、相対化するものに乏しい点、私的な解釈に陥りやすいことである。それは全体的には水準に達しているが、論文間に玉石混交が見られることは否めない。それについての個々の指摘は執筆者がよく知っていることであり、くどくど挙げないが時間をかけて修正し完成させて欲しい。

第二の「視座」では、自由で独自の発想、着眼点は、幅広い研究の蓄積にもとづくもので、豊富な研究歴に裏付けられなければ、奇を衒う形の詐術に陥りやすいことも事実である。まずはオーソドックスな研究を基本にしながら、斬新で多面的な問題意識を堅持することである。

三番目の「強靱さ」は「視座」とも関係するが、本論文の基調はどちらかといえばデスクワークに比重が置かれている。フィールドワークの成果も多く取

り込まれているが、決して多いとはいえないし、それからの発想や発言は限られている。口承文芸研究は、「実感実証の学」と言われるように、自分の足と体を使って対象に肉薄していくべきものである。特に庶民の話の世界という特殊性を把握する場合には欠かせない方法である。ただ、これは長い研究に随伴するものであり、今後の研究で示して欲しい。

いくぶん教戒的な課題、難点の指摘となったが、今後のさらなる研究の進化への期待であっても、本論文の成果を貶めるものではない。本論文の提出者の西座理恵は学位(文学)に学位を授与するに十分な資格があるものと認められる。

令和二年十二月十二日

主査	國學院大學教授	花部 英雄	印
副査	國學院大學教授	飯倉 義之	印
副査	高千穂大学教授	立石 展大	印

西座 理恵 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士(文学)の学位を授与される学力があることを確認した。

令和二年十二月十二日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	花部英雄	印
副査	國學院大學教授	飯倉義之	印
副査	高千穂大学教授	立石展大	印